

フェミニズムをめぐる複雑な様相に私たちはどのように介入できるのか？

田中 東子（大妻女子大学）

本発表は、主にふたつのパートによって構成される。

前半のパートでは、男性中心に構成された学術「界」——まさにピエール・ブルデューの良く知られた概念である“champ”としての「界」——でフェミニストとして生きていくための「感性」を私自身がどのように持続させていったのか、ひとりの「女性」研究者としての個人的な経験に基づいてお話しする。

例えば、女性研究者として研究対象を選ぶときにどのようなことが起こるのか。女性研究者として大学のポストを得ることはどのような経験となるのか。「フェミニスト」としてメディアの言説空間で発言することによってSNSや手紙を通じてどのような攻撃を受けることになるのか。「カルチュラル・タイフーン（2012年以降の名称は Association for Cultural Typhoon/カルチュラル・スタディーズ学会）」という日本においては稀有な運営方針——学会発表の場を常に国外の参加者に開き続ける、学会発表の形式を可能な限りパフォーマンスやアートと節合する、幹事会メンバーにジェンダー平等・年齢の多様性を必ず反映させる、会の存続自体が目的とならぬよう10年ごとに継続するか解散するか会員間で議論することを会則に盛り込んでいるなど——を貫いている学会に創成期から関わるなかで、組織的な運営にフェミニズムの知見を反映させるため、どのような工夫を凝らしどのような実践にとりくんできたのか。

まずはいち研究者としての活動と実践について一人称で語ることによって、こうした経験を自身の研究内容と結びつけ、発話の空間を開いていくための「技」や「知恵」をどのように獲得していったのか、若い世代の研究者のみなさんと共有したいと考えている。

後半部分は私の専門分野である、フェミニスト・カルチュラル・スタディーズの最近の研究の展開について、アンジェラ・マクロビー、ロザリンド・ギル、サラ・バネット＝ワイザー、シェリー・バジェオンら、イギリスの研究者たちの議論を整理しながら説明していく。イギリスのメディア研究者ロザリンド・ギルによれば、今日、私たちは「多様な（新旧の）フェミニズムによって表面上は特徴づけられている、現在の文化的な瞬間の複雑な様相」（ギル 2020, 157）のなかで生きているという。

ギルの言う「複雑な様相」とは、主流メディアやポピュラー文化のなかであたかも新しい現象であるかのように見えるフェミニズムの（再）台頭であり、古いフェミニズム——サラ・アーメッドによって議論された「興ざめフェミニスト」（ギル 2020, 167；バネット＝ワイザー 2020, 225）への拒否と再意味付けという両極的な事象であり、フェミニズムの（再）台頭への反発として「ふたたび活力を得ている反フェミニズムやポピュラーなミソジニー」（ギル 2020, 157）といったバックラッシュやミソジニックな攻撃が入り乱れ群雄割拠の様相を

呈している状況のことである。

実際、2017 年頃から日本社会においても「フェミニズム」という言葉や、行政的な言葉遣いである「女性活躍」や、女性を応援する言葉であると同時にネオリベラルなコノテーションももちあわせる「エンパワメント」といった言葉が、主流メディアや広告、SNS の言論空間で増殖し、注目を集めるようになった。こうした現象は、バネット＝ワイザーが「ポピュラー・フェミニズム」という言葉をもちいて議論しているように、一方では「フェミニズム」の人気や可視化、認知の高まりといった歓迎すべきものである。

しかし同時にそれは、「フェミニズム」によって理想とされる「自己決定でき、しなやかで、フレキシブル」(Harris 2004, 6) である／であることが良しとされる主体的で自立した女性イメージの商業的な利用につながる。マクロビーが指摘するように、女性たちは「自己の生産という活動に積極的に参加させられ、自分自身へのジャッジを厳しくしなければならない (...) 商業的な領域は、若い女性たちへの直接の呼びかけを激増させていて、その呼びかけを拒絶するか、それに応えきれない女性たちには厳しいペナルティが待ち受けている」(McRobbie 2009, 60) というような世界へと誘導されている。

そして自分自身への厳しいジャッジの空間は、美容とファッションの領域、主流メディアやオンライン空間、労働の場などで男性たちにたいして脅威にならないようなちょうど良いふるまい方、カナイ (2016, 18-19) の指摘する「社会的に評価されるタイプの女らしさ」をますます女性たちに強いるようになる。こうした議論は、『フェミニスト現象学入門』において小手川正二郎氏が指摘している「状況の中で経験される性的実存」(小手川 2020, 145-146) の問題とも共鳴しあうものである。

主体的に生き、夢や理想を叶え、独立と成功を達成することを積極的に求められる——つまりは「輝くこと」を強いられる女性たちは、自分自身のイメージと見え方をつねに気にかけて、「自己プロデュース」のスキルを駆使して、自分自身を生産し、アップデートし続けなければならない。その結果、現代の若い女性たちは、ますます新しいテクノロジーを使いながら自分自身をスペクタクルな商品として展示することなしには主体的に生きていくことができない状況へとおいやられている。

今日の女性たちを取り囲む商品化され商業主義と結びついたフェミニズムをロッテンバーグは「ネオリベラル・フェミニズム」(Banet-Weiser, Gill, Rottenberg 2019) と呼び、解放と同時に抑圧をもたらすこの矛盾したジェンダー体制をマクロビーは「ポストフェミニズム」(McRobbie 2009) と名付けることで、今日のフェミニズムがおかれた「複雑な様相」に批判的に介入しようとする。前半に語った私個人の女性研究者としてのさまざまな経験も参照しつつ、こうした様相へと共に介入し、変えていくために必要な「技」、「知恵」、「感性」について登壇者や聴講者のみなさんと討論していきたい。

【参考文献】

- Harris, Anita (2004) *Future Girl: Young Women in the Twenty-First Century*, Routledge.
- 稲原美苗・川崎唯史・中澤瞳・宮原優編著(2020)『フェミニスト現象学入門』、ナカニシヤ出版。
- McRobbie, Angela (2009) *The Aftermath of Feminism: Gender, Culture and Social Change*, Sage.
- Rosalind Gill (2016) "Post-postfeminism?: new feminist visibilities in postfeminist times" in *Feminist Media Studies*, Vol.16, No.4. (ロザリンド・ギル「ポスト・ポストフェミニズムなのか?」、『早稲田文学』2020年春号、河野真太郎訳、156-183頁)。
- Sarah Banet-Weiser (2018) *Empowered: Popular Feminism and Popular Misogyny*, Duke University Press (サラ・バネット＝ワイザー (2018)「エンパワード：イントロダクション」、『早稲田文学』2020年夏号、田中東子訳、212-252頁)。
- Sarah Banet-Weiser, Rosalind Gill, Catherine Rottenberg (2019) "Postfeminism, popular feminism and neoliberal feminism? Sarah Banet-Weiser, Rosalind Gill, Catherine Rottenberg in conversation" in *Feminist Theory*, 0(0), pp.1-22, Sage.
- 田中東子 (2020)「フェミニズムが「まあまあ」ポピュラーになりつつある社会で」、『早稲田文学』、118-127頁。